日本産業社会学の歴史的回顧からみる産業・労働社会学の21世紀的展望

日本学術振興会 学振PD（法政大学）

園田薫

目次

- 産業・労働社会学が抱える問題点
- 学説史的検討に関する先行研究
- 分析
- 労働現象を捉える社会学の系譜学
- 今後の産業・労働社会学の可能性について

産業・労働社会学が抱える問題点

- 日本の産業・労働社会学は、日本で四番目の連字符社会学として誕生して以来（富永 2004）人々の労働にかかわる多様な現象を捉えてきた、存在感の強い領域だったと評される（間 1975）
- しかし近年、労働現象を捉える社会学的視座を有した研究は、当該領域にとどまらず、様々な領域に拡大している（小川 2006; 藤本・池田 2019; 伊原 2021）

→産業・労働社会学がもっていたオリジナリティとは何かを問い直す声があがっている

産業・労働社会学が抱える問題点

- 産業・労働社会学の研究潮流に対する批判
  - 労働現場の細かな差異に注目しがちであり、労働現象を大局的に捉えることが軽視されている（稲上・川喜多編 1987; 山田 1996）
  - 個別の現場・現象をつなぐ理論の不足（山田 1996; 富永 2004）
  - 関心の多様化やテキストの減少にともなう産業・労働社会学への関心の拡散（小川 2006; 中川 2020）

→産業・労働社会学それ自体の「停滞」が指摘される（稲上・川喜多編 1987; 山田 1996; 小川 2006）

産業・労働社会学が抱える問題点

- 一方で労働研究という観点からみると、労働現象を扱うのは社会学以外にも経済学・経営学・心理学・法学などの多様な学問的アプローチがありうる（小川ほか 2015）

＝産業・労働社会学の「停滞」は、「労働現象に対する社会学的アプローチが、なぜ必要であり、どのような有用性があるのか」といった疑問を抱かせ、労働研究のなかの社会学としての立場をも揺るがせてしまう可能性がある

産業・労働社会学が抱える問題点

- 現状の問題点を克服するには、**労働をめぐる／労働研究のなかの社会学としての独自性・有用性がどこにあったのかを再検討**し、産業・労働社会学の輪郭を反省的に考え直す必要がある。

↓

本報告ではこれまでの日本産業社会学における学術的生産活動を、学説史的に検討していく。

学説史的検討に関する先行研究

- 間（1975）：労働現象を扱う社会学において、産業社会学は経済社会学と並ぶ二大巨頭であるが、労働・労使・経営（社会学）に分けるべきだ
- 河西（2003）：産業社会学と労働社会学にはイデオロギー的対立があり、労働社会学は経営者ではなく労働者の「当事者の論理」を重視する

→産業・労働社会学は、決して一枚岩的な研究領域ではなく、様々な関心・イデオロギーをもった研究（者）の集合として存在し、機能している

＝社会学内部のヨコのつながりに注目すべき

学説史的検討に関する先行研究

- 富永（2004）：産業社会学には応用志向的性格が強く、一般社会学の概念や理論が排除されている
- 上林（2012）：産業社会学は実証性・批判性・主体性の重視という社会学的特徴を有しているが、今後はグローバル化の影響を射程に含める必要がある
- 藤本（2020）：元来産業社会学では社会学以外の研究分野との交流が活発であったが、特に2000年代以降、そうした特徴が薄れつつある

→産業社会学の今後の営みに関する危惧が述べられる

＝産業社会学のタテの歴史を辿ることの重要性

学説史的検討に関する先行研究

- これまでの研究では、労働現象を扱う社会学の間の緊張関係のなかで産業社会学が営まれてきたこと、産業社会学の志向性・課題・知的活動が時代によって変遷してきたことが述べられた

→しかしヨコの関係性とタテの歴史を同時に視野に入れた検討は、ほとんど行われていない

→横並びの領域社会学との関係性を、そのなかで産業社会学がいかなる知的生産活動を行なってきたのかという学説史的観点から検討する

分析：産業社会学の定立（~1958年）

- 労働現象を扱う主な連字符社会学
  - 尾高（1941）：共同性を中心に職業生活を探求する**職業社会学**
  - 松島（1951）：階級闘争の視座から労働を契機とする共同生活を捉える**労働社会学**

→両者の違いは意識されるも、共同性を捉えるという共通性が強調され、協働が目指される

→アメリカの人間関係論を軸に、両者を取り込む形で尾高（1958）が産業社会学を構想する

分析：産業社会学の定立（~1958年）

- 産業社会学の視座：労働者の視点に立ち、人々の意味や生活実相に着目する人間溯及的視点
  - 「二面的な性格を持った労働現象を対象とし、人間的な、しかもそれを社会的な現象として理解し、問題とするところに労働社会学の性格を定めるのである」（松島 1952: 58）という主張を含んだ視座

→尾高は人間溯及的視点こそが、労働を対象とした隣接分野と差別化を可能にする、(産業)社会学が独自にもつ着眼点だと主張

分析：産業社会学の拡大（~1970s）

- 産業社会学は労働現象を扱う一大領域になることで、概念として既に存在していた複数の連字符社会学を、潜在的な対象領域に含めていった
  - ドイツ由来の**経営社会学**は、日本で本格的に受容される前に、産業社会学へ吸収された（濱嶋 1952）
  - 尾高が産業社会学へ取り込もうとした職業を基点とする社会構造の分析（尾高・西平 1953）は、SSM調査などを経て、のちに**社会階層論**として花開く
  - 組織に関する理論的考察（≒**組織社会学**）を、産業社会学の範疇とした （萬成 1968; 佐藤 1968など）

分析：産業社会学の拡大（~1970s）

- 産業社会学は、ミクロな労働者の主体性を中心としながらも、マクロな社会変動を議論の射程に入れることを企図していた

→近代化論や日本的経営論の流行も相まって、産業社会学は社会学者が抱いていた学問的・時代的な関心の最大公約数として機能

→人間溯及的アプローチという方法論的視座のみを共有することで、産業社会学という枠組みのなかでの協働が可能になるだけでなく、明確な役割のなかで他領域との議論や協働も促進された（石川 1988）

分析：産業社会学の拡散（1980s~）

- 尾高の掲げた産業社会学の求心力低下
  - 人間関係論から組織社会学へ（アメリカ）
  - 実証的テーマ設定に対する理論志向の弱さ
  - 日本企業の成長逓減に伴う日本的経営の陰り

↓

個別領域の差異化・卓越化が一層すすむ

分析：産業社会学の拡散（1980s~）

① **労働社会学**（1982~）：労働過程論を軸とし、労働者の主体性に着目する学問として再定式化

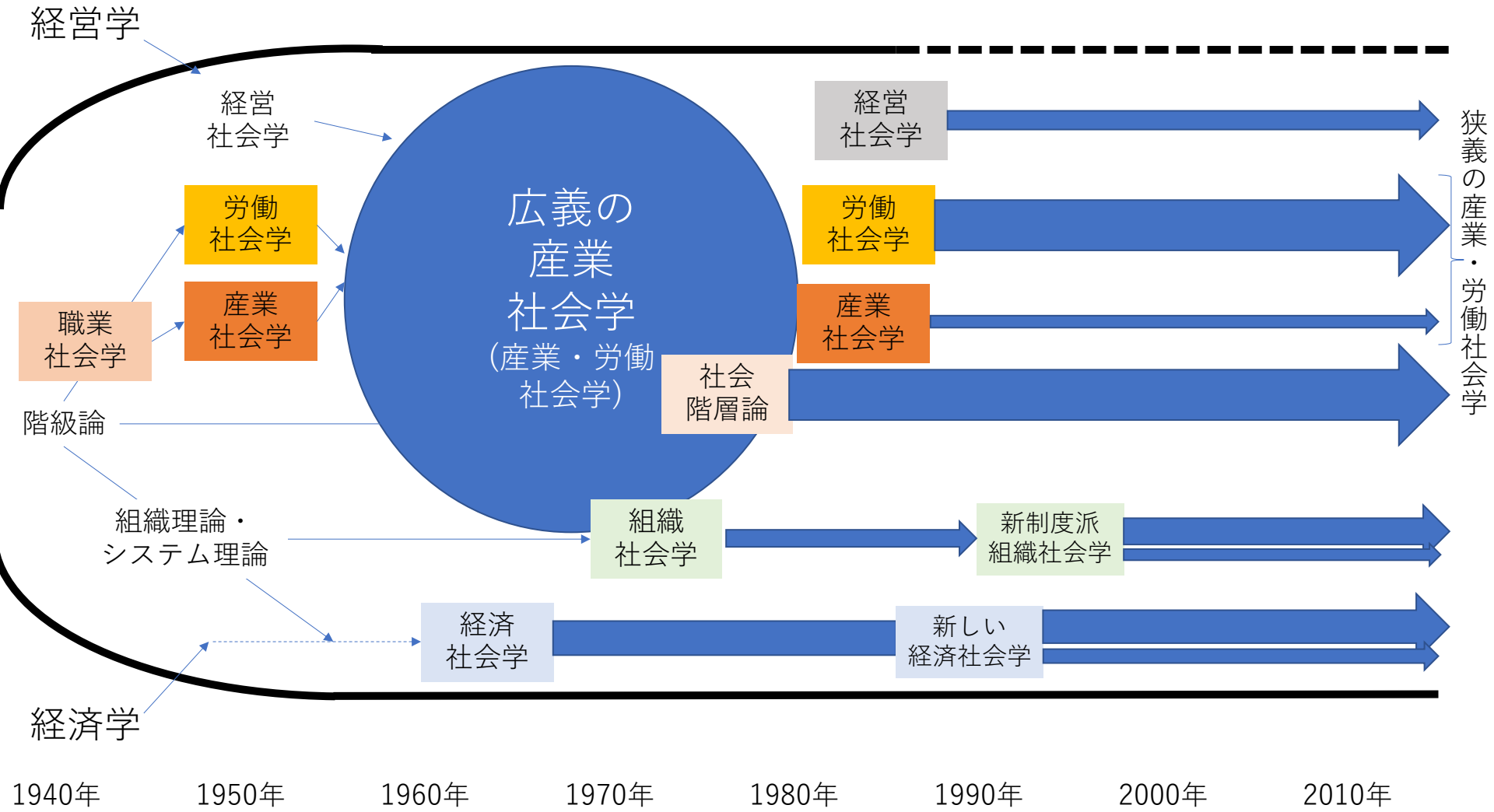
② **経営社会学**（1989~）：企業経営の動向に焦点化した領域社会学の構想が目指される

③ **組織社会学**（1968~）：近代組織の構造を扱いながら、関連議論を取り込んで多方面に拡大

④ **社会階層論**（1970s~）：欧米の因果連関モデルを受容し、序列化される社会構造を計量的に検討

⑤ その残余としての産業社会学

労働現象を捉える社会学の系譜学



産業・労働社会学の発展可能性について

❑1970年代までの産業社会学

◆職業社会学と労働社会学の統合を目指して形成された産業社会学は、隣接する領域社会学の関心を抱えこんだ協働の場として機能していた

◆人間溯及的視点を（労働を扱う）社会学に通底する分析視角だとして掲げることで、労働者の意識や集団間の関係性を社会との関連のなかで捉えるという目的性が共有され、労働にかかわる他領域との協働も促進されていた

→議論を生む「プラットフォーム」の整備に成功

産業・労働社会学の発展可能性について

◆1980年代以降、産業社会学の求心力が弱まると、複雑な影響関係のなかで多様な領域社会学が確立され、それぞれが独自性を発揮している現状にある。

◆研究領域のガラパゴス化は、各領域社会学の差別化が強調されるあまり、労働現象を扱う「社会学」としてのアイデンティティと独自性を見えにくくさせているとも考えられる

→産業・労働社会学が「発展していた」という認識の背後に、社会学としての一枚岩的イメージが関与？

産業・労働社会学の発展可能性について

- 産業・労働社会学の再プラットフォーム化に向けた取り組みの必要性
  - それぞれの領域社会学で蓄積された視点や知見の積極的な交換
  - その止揚を目指す「社会学」としての共通認識・議題の整備
  - 他学問の労働研究（者）に理解されるための独自性の再検討

参考文献

- 石川晃弘，1988，「産業社会学とは何か」青井和夫監修・石川晃弘編『産業社会学』サイエンス社，3-15.
- 稲上毅・川喜多喬編，1987，『リーディング 日本の社会学 9 産業・労働』東京大学出版会.
- 伊原亮司，2021，「分野別研究動向（労働・産業・経営）」『社会学評論』72(1): 37-57.
- 小川慎一，2006，「分野別研究動向（労働）――産業・労働社会学の現状と課題」『社会学評論』56(4): 964-981.
- ――――・山田信行・金野美奈子・山下充，2015，『産業・労働社会学』有斐閣.
- 尾高邦雄，1941，『職業社会学』福村書店.
- ――――，1958，『産業社会学』ダイヤモンド社.
- ――――・西平重喜，1953，「わが国六大都市の社会的成層と移動」『社会学評論』3(4):2-51.
- 河西宏祐，2003，『日本の労働社会学 新装版』早稲田大学出版会.
- 上林千恵子，2012，「産業社会学」『日本労働研究雑誌』621: 34-37.

参考文献

- 佐藤慶幸，1968，「産業官僚制」松島静雄・岡本秀昭編『産業社会学』川島書店，61-78.
- 中川宗人，2020，「戦後日本の産業・労働社会学における問題構成の一側面——教科書の分析を通して」『年報社会学論集』33: 192-203.
- 間宏，1975，「産業社会学の再考と展望」『社会学評論』25(4): 102-116.
- 濱嶋朗，1952，「經營社會學の問題點——産業社會學に關聯して」『社会学評論』2(3): 100–109.
- 藤本昌代， 2020，「日本の産業社会学における戦後から現在に至るのホワイトカラー研究経緯」『同志社社会学研究』24: 1-24.
- ———— ・池田梨恵子， 2019，「日本の社会学における2000年以降のホワイトカラー研究経緯(1) ——尾高邦雄の職業社会学的視点の再確認と現代の傾向分析」『評論・社会科学』130: 107-141.
- 松島静雄，1951，『労働社会学序説』福村出版.
- ————，1952，「労働社会学の構想と課題」尾高邦雄編『労働社会学』河出書房，3-66.
- 山田信行，1996，『労使関係の歴史社会学——理論的体系化にむけて』ミネルヴァ書房.
- 萬成博，1968，「産業社会学の体系」萬成博・杉政孝編『産業社会学』有斐閣，210-226.